

会員へのお知らせ

日本産科婦人科学会会員 各位

1997年日本産科婦人科学会周産期委員会による 「妊娠中毒症の栄養管理指針」¹⁾の推奨の停止について

2018年9月1日 Science 誌において、わが国で1980年頃より低出生体重児の割合が増加し始めた主因として、若年女性のやせ指向とともに1981年に妊娠中毒症の予防を目的として妊婦に厳しい体重増加制限を推奨したことを記載し、わが国の大半の産婦人科医師は厳しい体重増加制限を是正することに反対しているとの記事が掲載されました²⁾。この記事を受けて2018年9月13日に、厚生労働省子ども家庭局母子保健課から日本産科婦人科学会周産期委員会宛に、日本産科婦人科学会の対応に関して照会がありました。

周産期委員会としては、1997年に決定し1999年に公表された「妊娠中毒症の栄養管理指針」¹⁾に関して、体重増加の推奨値が妊娠による生理的な体重増加値を下回っている可能性が危惧されること、さらに同指針による妊娠高血圧症候群の予防効果を支持する新たなエビデンスが乏しいことから、歴史的な役割を終えたと判断し推奨を取り下げる事に決定しました。さらに、2019年2月の周産期委員会において、新たに妊婦の体重増加の推奨値を検討することに決定し、この件を2019年3月の理事会で報告いたしました。

一方、Science 誌の記事には明確な誤記載があることが明らかとなりました。1981年に出された妊娠中毒症を発症した妊婦に対する低栄養の推奨³⁾を誤って取材し、妊娠中毒症の予防を目的として一般妊婦を対象とした体重増加制限を推奨した1999年公表された指針¹⁾の内容と混同して掲載し、その誤認を根拠として、わが国で1980年頃より低出生体重児が増加し始めた主因の一つと結論しています。さらに、わが国では、産婦人科診療ガイドライン 産科編 2011より一貫して、「体重増加量を厳格に指導する根拠は必ずしも十分ではないと認識し、個人差を考慮したゆるやかな指導を心がける」と推奨してきた点も記載されておりません。そこで、2018年9月14日に、Science 誌の e-Letter 上に、日本産科婦人科学会の指針や推奨に関する取材内容に誤りがある点、ならびに、わが国における低出生体重児の割合の増加には多様な因子が関与する可能性が想定される点を反論として投稿し掲載されました⁴⁾。

- 1) 中林正雄. 妊娠中毒症の栄養管理指針. 日本産科婦人科学会雑誌 1999; 51: N507—N210
- 2) Normile D. Staying slim during pregnancy carries a price. Science 2018; 361: 440
- 3) 古谷 博他. 産科婦人科栄養・代謝問題委員会報告. 妊娠中毒症栄養管理指針の改正について. 日本産科婦人科学会雑誌 33: 730, 1981
- 4) Itoh H, et al. Multiple causative factors underlie low birthweight. Science, eLetter: 14 October 2018: <http://science.sciencemag.org/content/361/6401/440/tab-e-letters>

2019年6月22日

公益社団法人日本産科婦人科学会 周産期委員会
委員長 金山 尚裕